

# Keeper Lexus TOM'S LC500三者面談

「ただただ、悔しい…」もてぎでの最終戦、ヴィクトリースタンドに特設された「Keeperファンシート」に座る約220名のファンはレース直後、誰ひとり動かなかつた。前戦のオートポリスでの第7戦でまさかの優勝を果たし、100号車「RAYBRIG NSX-GT」と同ポイントでシリーズチャンピオン争いに挑んだ最終戦だったが、無念の連覇ならず。それでも平川亮選手、ニック・キャッシュ選手は、初戦から興奮と感動の走りを私たちに見せてくれた。11/18(日)に行われたインタープロトシリーズ終了後、平川亮選手とそのお父様の平川晃氏、関谷正徳監督に今シーズンの総評と来シーズンについてのヴィジョンを聞いた。

**「チームは心・技・体。三位一体で戦えば必ず勝てる！」**

平川 晃 AKIRA HIRAKAWA

**「これからのモータースポーツは、運転技術を競うように変化していくのではないか」**

関谷 正徳 MASANORI SEKIYA

**「100%の走りを見せる自信はあります。来シーズンはチーム力を上げていきたい」**

平川 亮 RYO HIRAKAWA

## 最終戦、多くの人を感動させた平川の走りは“救い”だった

——今シーズンのSUPER GTの総評は？

関谷：唯一、菅生での第6戦だけ、ポイントを獲得できなかったが、ウエイトハンデを積んでのレースには不利なサーキットだったので仕方なかったと受け止めています。平川亮、ニック・キャッシュのコンビは今の時点では日本で最強のコンビだと思っているので、彼らにこれ以上求めるところはありません。我々チームスタッフの判断ミスやピットミスなどの小さなミスが、大きなミスにつながるのがモータースポーツです。大きく膨らんだ風船が、細い針で刺すだけで割れてしまうのと同じです。平川亮：ニックからの「タイヤがやばい」という情報を受けた時点でピットインするべきだったんですが、ニックのタ



イムは悪くなかったし、100号車(RAYBRIG NSX-GT)が引く張っていたのでピットインしなかった。それによって100号車との差が10秒近く開いてしまいました。関谷：計画どおり、早くピットに入れていけば勝てたと思います。監督として冷静な判断ができなかったことは本当に反省しています。しかし終わったことは取り戻せません。監督とは何か、改めて考えさせられたレースでした。平川亮：コースインしたときには、100号車との間にLC500が3台、NSXが1台いました。それを抜いた段階でタイヤをかなり使ってしまい、もうヘロヘロでした。100号はベースコントロールしていたように見えたり、1回も抜けるチャンスがなかったのが悔しいです。関谷：しかしあのときの平川の走りは、サーキットにいたものすごいたくさんの人を感動させました。これが私の救いでした。小さいミスをなくし、質の高いレースをするためにはチームと選手との信頼が重要だと思います。

## タイヤ交換があと3秒早ければ勝てたかもしれない

平川晃：1年を通してホンダのNSXは本当に速かった。だから正直言って、最終戦で同ポイントで戦えるとは思っていませんでした。良い走りが出て最終戦まで争いがもつたことは良かったと思います。もしかしらピットでのタイヤ交換があと3秒早ければ勝てたかもしれない。タイヤ交換の1.5秒差が勝負の分かれ目になっていたのではないかと考えます。終わってしまった今「たられば」を



言っても仕方ないんですが、レースは「心・技・体」です。「心」がドライバー、「技」がチーム、「体」がスポンサーです。それぞれが同じモチベーションで高め合い、三位一体で戦えば勝てると思っています。

## 朝から晩まで、ガソリンがなくなるまで走った

——お父様にお聞きしたいのですが、どうやってドライバーとしての亮選手を育てられたのですか？

平川晃：亮がモータースポーツをはじめたのは、中学1年のとき。12歳の冬でした。他のドライバーに比べたら遅い方です。それまでは自転車(ロードレース)をやっていたんです。でもあるとき、亮がケガをしちゃったもんだから「自転車は危ないからゴーカートに乗るか?」と聞いたら乗りたいということで、地元のゴーカート場に連れて行ったんで



す。そうしたら朝から晩までガソリンがなくなるまで帰ってこない。亮はずっと走っていました。雨の日でもレインタイヤなんて履いたこともなかったです。スリックで走っていました。だから5、6歳からはじめてと同じくらい走っただろうし、はじめてレインタイヤを履いた時には「レインタイヤ、すごいグリップする」って言ったんです(笑)。素質なのか、その頃の経験によるものかは分かりませんが、自分で強引に車を動かすことなく、タイヤと相談しながら速く走れるのが亮の強みの一つだと思っています。平川亮：自分からやりたいって思ったのは忘れてましたが、「自転車みたいに漕がなくていいからいいな」とは思っていました(笑)。とにかく楽しくてずっと走っていたのは覚えています。

## ニックのスタートの速さにみんな引いてると思います(笑)

——亮選手にお聞きしますが、ニック選手の強みはどこだと思われませんか？

平川亮：もちろん、スタートしてからの瞬発力です。スタートして2、3周が強い。すぐに、間違いない、遠慮なく抜く。たぶん周りが引いているんじゃないかと思えます(笑)。菅生の第6戦では、スタートで接触したのでオートポリスの第7戦のときは、バトン選手とのデッドヒートだったのもあり躊躇していましたが、もてぎの最終戦は何か何でもという勢いでしたね。

関谷：先ほども言いましたが、亮とニックは最強のコンビだと思っています。あとは勝ち続けるためによりハングリに生きてほしい。チャンピオンを取り続けることでファンの期待に応え、自分のファンはもちろん、カーレースのファンを増やして欲しいですね。

## SUPER GTは、世界レベルで見てもダントツに面白い

——SUPER GTによって、モータースポーツファンはすごく増えましたよね？

関谷：そうですね。SUPER GTは世界レベルでみてもダン



トツに面白いレースだと思います。最初から最後までドキドキが止まりませんからね。

平川亮：ドライバーとしては、SUPER GTはウエイトハンデがあると、中盤に争えないのがちょっと不満。いつもイコールコンディションで争いたい。でもそれが外からみていると面白いんですよね。



平川晃：民放のテレビ番組「GTプラス」もすごい視聴率上がっていますよね。たまに亮と食事に行くとファンの方が声をかけてくれることも多くなりました。でもまだ「隠れファン」の域かな。広島カーブが「カープ女子」を生んだように、「トムス女子」が出てきたら面白いですね。

## 「勝った負けた」をシンプルに楽しめるレースを

——将来的に、エンジンがなくなってモーターになることは考えられますか？

関谷：あのバリバリというエンジン音の迫力が好きというファンも多いので完全にはなくならないと思いますね。平川亮：スペインは20年後には電気自動車以外の販売を禁止するし、フランスもまもなくそうなるでしょう。モーターが変わるときは一気に来ると思います。そうなら、レースは街中でやればいんじゃないかな。レースって街おこしになりますから。フォーミュラEは、基本公道で行われています。200キロまでしか出ませんが十分な迫力です。

関谷：モーターになれば、マシンのコストが大幅に抑えられ、その分選手たちのギャランティに回せるだろうし、国からの補助も考えられないこともないだろう。今のモータースポーツのドライバーは、テニスや野球のような「スポーツ選手」とはまだまだ見なされていない。モータースポーツにおいては、車やタイヤの技術ばかりをアピールして、選手にスポットライトがなかなか当たらないんです。高度成長期の時代からモータースポーツの意義は技術競争でした。しかしその意義は少しずつ変化してきていると感じています。技術力をメインにしていってと天井知らずのコストがかかるようになったからです。これからのモータースポーツはよりスポーツ化する。運転技術を競うように変化していくべきではないかと考えています。



## それぞれの領域を越えて、一丸となってレースに挑む

——TOM'Sのオーナーが変わったことで影響はありますか(※)?

平川晃：レースや車業界とはまったく違うジャンルのエンターテインメント企業のオーナーが変わったことで、まったく違う視点から新風を呼び込んでくれる気がしますね。関谷：基本的な体制は変わりません。新しいオーナーである谷本さんは、これまでレースには無縁の方です。でもはじめてモータースポーツに触れて、ものすごく興奮されています。「こんなに面白いんだから、世の中にもっと伝えなければ!」と張り切っています。鈴鹿の第3戦のときもピットワークが遅かったので、レース後、谷本さん含め、メカニックや選手など全員集めて改善会議をしました。これまではメカニックマターだったんですが、それぞれの領域を越えて、コミュニケーションをし、一丸となってレースに挑む。チームのあり方を大きく良い方向へと変えてくれると期待しています。

※2017年12月、スポーツ特価型SNS「モブキャスト」を通じたソーシャルゲームが主力の「モブキャストホールディングス」が「トムス」を買収。「モバイ」インターネット領域におけるサービス開発および運営ノウハウをもつモブキャストがレースでの実績を基に高いブランド力のあるトムスを子会社化することで、「レース事業」におけるトムスのさらなるブランド力向上と新たな価値を創出したコンテンツ展開、トムスの新たな事業価値を創出していく。

## 走ることに集中できる環境作りとチーム力を上げていきたい

——亮選手から、SUPER GTへの意気込みをひとこと。

平川亮：今シーズンは、勝たなきゃいけないというより勝ちたいという思いで連覇を目指していたので、本当に悔しかったです。チームとのコミュニケーションを図ったり、ニックが快適にレースをしていないと感じたらサポートしたりなど、僕らが走ることに集中できる環境を作ることができたと思います。来シーズンは、環境作りはもちろん、チーム力を上げていきたいと思っています。100%の走りのできる自信はあるので、チームのモチベーションをマックスまで高め、ピットワークのタイムを上げたり戦略を緻密に練るなど、チームが一丸となってレースに臨みたいと思います。

